

2018年のロシア文学会（第68回大会報告をかねて）

日本ロシア文学会会長 三谷恵子

2018年のロシア文学会全国大会は、10月26日（金）のプレシンポジウムを皮切りに27日（土）、28日（日）と、名古屋外国語大学を会場として開催されました。

プレシンポジウム『カタストロフィの想像力とロシア文化』では、作家の平野啓一郎さんによる記念講演、また亀山郁夫名古屋外国語大学学長ならびに本学会員の中澤敦夫氏、乗松亨平氏の3名によるシンポジウムが行われました。平日夕方の開催にもかかわらず150名ほどの聴衆が集まったのは、講師陣の豪華な顔ぶれのためばかりではなく、「カタストロフィ」という、さまざまな意味で今日的な問題がテーマであったということにもよるでしょう。

27日、28日の大会では、研究発表会、総会、また2018年大賞受賞者である埼玉大学教授澤田和彦氏による記念講演が行われました。研究発表会には、国際参加枠による台湾からの発表者3名を含む26件の個別発表、2件のパネル、加えて日本ロシア文学会とカザン連邦大学の研究者による合同国際シンポジウムがありました。秋晴れのすがすがしい名古屋外国語大学キャンパスで、多くの学会員が集いさまざまな議論を交わす機会になったと思います。会場校関係者、また今大会関係各委員会の皆様に感謝申し上げます。

この一年の学会の動きとしては、2017年秋からスタートした新執行部ならびに新理事会において、学会のさらなる活性化、またアクチュアルな問題に迅速に対応できる体制づくりを念頭に、いくつかの新たな試みが行われたことをご報告したいと思います。具体的には、倫理委員会に関する内規の改定、学会内外の諸企画に対する、学会の後援・協力・共催などといった関与の仕方の明文化、若手ワークショップ企画などがあります。学会誌の掲載論文についても、大平陽一編集委員長のご尽力により、J-STAGEに登録する道筋が確定し、今後実現される運びとなりました。「まずはグーグル検索」が当たり前になっている昨今、J-STAGEへの登録によって、学会誌掲載論文の引用数が向上するなどのメリットが見込まれます。

またこれらと並行して、事務局体制も、1名が2年担当するという従来の慣行を変え、2018/19年度より、2名で仕事を分担する方式を採用することが決まりました。これは、会員全体の中での専任教員の減少、事務局担当者の負担減などを考慮しての変更であり、すでに2年事務局を担当している野中進氏がさらに2年間この責務にあたり、加えて北海道大学の安達大輔氏にも新たに事務局に加わっていただくことになりました。

このように多くの会員のお力により活動を展開している中ではありますが、すべてが順調というわけではありません。本学会は、瑣末な日常を超えた次元で思索し、議論する研究者の集まりではありますが、とはいえ現実と無縁でいるわけにはいきません。長年学会を支えてくださった長期会員の方々、いわゆる 40 年会員の増加、加えて学生会員のみなさんへの会費減免措置、また一部会員の会費未納入などがあり、財政が年々厳しくなっているのが現実だという点もお伝えしなければなりません。執行部・理事会でも、削減できる部分は削減し、また会費未納入会員への督促など、可能な措置を真摯に考え実行していく所存です。また今後は寄付の制度なども整えて、学会収入の多元化を実現し、学会活動の充実化を図っていきたいと考えています。

会員各位のご協力をお願いいたします。